だし、ケーキでも買って早く戻ることにしよう。店に入ろうとすると、何故か自動ドアが開かない。行ったりきたり、ジャンプをしたり、やっと開いたドアをすり抜け、ショーケースの中を覗く。ガラスの向こう側から同じように見ている１０才位の少年がいる。目が合った。なんだか昔の自分に似ていた。いくつかケーキを選び、支払いをドルでしたのに、おつりは円だった。

７日目。ドアをノックして「！よだカナタ」と呼ぶ声がした。なんだかドアが大きくなったような気がしながら、ドアを開けると、だぶだぶの白衣をきて、幼き頃のタナカが上半身だけで消えそうに立っていた。そのとき男はハッとした。

月曜日、今日は授業が無い日なので友人と午前中から会う約束をしていた。しかし、友人の家の近くまできて「Ｉ　Ｍ　ＳＯＲＲＹ，今日は体調が悪いから会えない」とのメールが来た。「せっかく電車に乗ってここまで来たのに」と内心腹立たしかったが、友人の家から銀座が近いので買い物をしていこうと三越に入った。ニットの帽子が欲しかったのでポール・スミスの店でニット帽を見た。気にいったのですぐに買った。銀座の街は月曜の午前中ということもあって、人はさほど多くなかったが外国人の観光客とおぼしき人が多々見られた。　火曜日、今日は天文学の授業があるから昨日買った帽子をさっそくかぶって登校した。駅のトイレに入り鏡を見ると、帽子をかぶっているせいか自分がちょっぴりいつもよりもおしゃれに見えた。学校に着くと友人とすれちがった。「おはよう。」と声をかけると、振りかえり「えっ、おはよう。坂口君じゃないか。帽子かぶってたから分からなかったよ。でもなんか似合ってるし芸能人みたいでかっこいいね。」と誉められた。嬉しかった。

水曜日、今日も帽子をかぶって登校した。朝の新宿の駅は混雑しているのでたくさんの人とすれ違う。女子高生の２人組とすれちがった時に会話が聞こえた。「今のニット帽かぶってた人ちょうかっこいいんだけど～。」嬉しかった。「おれって帽子が似合うのかな。」と思いつつ小田急線に乗った。すると、向かいに座っている女子大生たちがこっちをみながら「前に座ってる人かっこいいよね、ハーフぽいよね。」と、ひそひそ話が聞こえた。「おれは純日本人なんだけどな。」と思いつつも嬉しかった。恥ずかしくて深々と帽子をかぶった。

木曜日、朝起きるとすぐに携帯にメールが来た。「Ｉ　Ｗａｎｎａ　ｓｅｅ　ｙｏｕ．Ｐｌｅａｓｅ　ｈｅｌｐ　ｍｅ！」と、いう月曜に会えなかった友人からのメールだった。朝からふざけやがってと思い、「Ｉ　ｃａｎｎｎｏｔ　ｓｅｅ　ｙｏｕ．」と返信して家をでた。もちろん今日も帽子をかぶっている。しかし、今日は女子高生たちとすれちがっても「かっこいい」という言葉は聞こえなかった。

金曜日、朝食を食べて家を出るといきなり外国人の男性に腕をつかまれた。必死な表情で何かを訴え、私の帽子を奪いとろうとしてきたので、変質者だと思い、「Ｓｏｒｒｙ！」と言って腕をはらって急いで家の近くの駅へかけこんだ。学校に着いて教室の席に座ると、みなこっちの方を見る。不思議そうな顔で見る者もいれば、「かっこいい」とひそひそ話をしている女の子たちもいる。複雑な気持ちだったが、今朝の外国人は一体何者だったのだろうか。

土曜日、今日は高校時代の友人と表参道で会う約束をしていたので、時間通りに待ち合わせ場所に行った。深々と帽子をかぶり友人におしゃれなところをアピールしようとはりきっていた。待ち合わせ場所に友人が来て「久しぶり。おはよう。」と、声をかけたが会釈しか返ってこない。帽子をかぶってるから分からないのかなと思い、帽子をとって声をかけたが無視されてしまった。しばらくして、友人は私の目の前で帰っていった。

日曜日、今日は朝から頭が重くなんだか大事なものを忘れているような気がした。朝刊を読もうとするが、字が読めない。しかも、読めないだけではなく言葉を話せない。日本語を忘れてしまった。洗面所の鏡の前で私はすべてを悟った。鏡に映った自分は自分ではなく、見知らぬ外国人だった。銀座で買った帽子をかぶってから徐々に顔が外国人になってきていたのだ。その段階で水曜日はハーフだったのだ。月曜に会えなかった友人はよく、銀座の三越で買い物をしていてポール・スミスの常連だった。そう、金曜に私の腕をつかんで帽子をとろうとしたのは外国人の姿に変わり果てた友人だったのだ。そして、銀座にいた外国人観光客はみな、もとは日本人だったのだ。気がつくと、母と弟が私をにらんでいた。しばらくして、警察が来て私は連行されてしまった。母と弟が何か言ってるようだったが私には日本語が分からない。「Ｐｌｅａｓｅ　Ｈｅｌｐ　Ｍｅ，Ｓｏｍｅｏｎｅ…」

○ 月× 日 (月)
雲の無い濃紺の空には、白い月と幾千の星星が輝いていた。月は周りに散ばる星星を従えるかの様に強く強く輝いていた。遊び疲れた私は酔いの廻った千鳥足をふらつかせながら空を見上げた。冬の息と煙草が混ざり合って機関車の様にもくもくと白い煙を吐いた。舞い上がる煙を透かしながらも月は絶対的に輝いていた。

○ 月× 日 (火)
目覚めるともうお天道様が高く昇っている。窓越しに見上げた空には燦燦と輝く太陽と、昨日の余波だろうか薄っすらと消えそうな月が見えた。

○ 月× 日 (水)
バイトは私にとって最も億劫な時間。そして、終わった後の開放感が最も大切な時間。46 階を一気にエレベーターで降りて、新宿の街へと飛び出す。ガラスの自動ドアが開くと外からの冷たい空気に身を震わせ、空を見上げる。都庁や高層ビルに直角に切り取られた狭い夜空は一枚の写真である。日々、その装いを変える写真である。今日は妙に星が瞬いている。都会でこんなに綺麗な星空を見たのは始めてである。

○ 月× 日 (木)
遊びに来ていた彼女を駅まで送り、僑居へと帰る中途、カラカラと後ろから何かが転がる音がした。振り向くと微かに光る石を見つけた。丁度掌くらいの大きさで、触ると仄かに温かい。不思議だと思い、拾い上げて持ち帰った。

○ 月× 日 (金)
目覚めると部屋の中が薄暗い。薄暗い中で拾った石がまだ光っている。昨日より光を増している様だ。何時もならカーテンを白く染める光が入らないから外は雲っているのかと思い、開けてみると雲一つ無い快晴である。太陽が輝いているのに何だか薄暗い。石を窓の傍らの机の上に乗せるとまるで生きているかの様に微かに瞬いた気がした。

○ 月× 日 (土)
相変らず薄暗い。外へ出てみても薄暗い。何処へ行っても薄暗い。新宿のネオンすら色を失った様だ。明るいのはただ机の上の石だけである。電灯を点けても、点いているのか点いていないのか解らない。

○ 月× 日 (日)
一切の光を失ったかの様に暗い。光る石は強く強く光を放つ。直視できないほ

どの光だ。眼を隠して石を窓から投げ捨てた。石が転がる辺りだけが明るい。それ以外は暗い。もしかしたら石はありとあらゆる光を吸い取ってしまったのではないか、そう不安が頭を過ぎった瞬間、石は空へと舞い上がった。そして天空に張り付いて一点の星となった。光を失った地球はどうなるのか私には解らない。ただ私に解ることは、星は光を放つのではなくて、光を集めると言うことだけだ。

一日目
今日もいつもと同じように、ベッドの上で目が覚めた。いそいそと朝の用意を済ませ、家族のいる一階へと降りていった。「おはよう。」と声をかけると、僕の顔も見ないまま、「おはよう。」と母は朝食の準備をしながら返した。「ちょっと急がないと、間に合わないかもね。」母は時計を見るように促しながらぼやく。「はいはい、かしこまりました。」時計を見て、時間に余裕が無いのを自認した僕は、朝食を忙しく口に運んだ。家を出て、空を見上げた。燦々と照り付ける太陽とゆっくり流れる雲。天気がいい。何だか、体も軽い。

二日目
朝、目が覚めた。寒くて布団にくるまったまま、ぼんやり部屋を眺めていた。まとまったホコリがゆらり宙を舞い、床に弾んで、また舞った。

三日目
寝ボケているんだろう。ベッドから眠気まなこで机の方を見ると、昨日書いたレポートの一枚が、フワッと浮かんで机を横切り、さながら羽毛のようにゆるりと床に舞い降りた。このときは、キレイだなぁなんて、その程度にしか思わなかった。だって、顔を洗ったあとはもう、そんな不思議な素敵な瞬間には出くわさなかったから。

四日目
少し時間が出来たし、前から欲しい本があったから、厚着をして、マフラーを首に巻き、街に出た。外を歩く。やけに体が軽く感じる。吐く息は白く、少しうつむきながら、足早に本屋に向かう。信号を待つ。隣で男性が煙草をふかし、前では男女が楽しげに言葉を交し、後ろの男が携帯で声だかにこれからの予定の打ち合わせをしていた。溜め息混じりに、ふと、反対側で信号の色が変わるのを待つ人々の方を見た。一番手前で待つ男、缶コーヒーを片手に、携帯に指を忙しくはわせていた。ふいに近くの人の荷物が彼の腕にぶつかり、水平を保っていた缶は大きく傾き、中のコーヒーが飛び出した。「あ～ぁ」心の中で呟いた次の瞬間、ハッと息を飲み、体が硬直した。缶からこぼれたコーヒーは大小様々な粒になり、静かに下降していくのだ。あたかもスローモーションの映像を見ているがごとく。時間がゆっくり進んでいるかのように。そう自分に押し付けた僕の想像は、信号が青に変わると同時に打ち消された。信号が青になり、待ちわびた人々が一斉に横断歩道を渡り始め、人々が白線の上を行き交う。しかし、その人達の動きは尋常じゃない。普通じゃなかった。やけに流動的に歩を進め、水玉のコーヒーをするりとかわし、反対側へ向かう。平然と、当たり前のように、流れるように。僕は動けなかった。今起きた出来事と、自

分が動くことへの恐怖に。さっきのそれは、まるで水の中を漂っているような、そんな感じだった。

五日目
ゆっくり頭をもたげて、ベッドから体をはがす。少し体が、浮いた気がした。悪寒を振り払うように、部屋のカーテンを開けるやいなや、その場に崩れ落ちた。窓の向こうは一面水の粒だらけ。恐ろしく遅く、雨が降り注ぐ。

六日目
その日の朝、ゆっくり目を開ける。「ん？」あたりは真っ白。目の焦点を急いで合わせる。うっすらと見える、傷やホコリ。視点を変えた。気付いた。僕は部屋の天井に直面している。僕の体は浮かんでた。何となく、わかっていた。重力が無い。少し、部屋の中を泳いだ。

七日目
今朝は、窓に張り付いてるような体勢で目が覚めた。窓枠を押し、身を翻した。漂う本やら何やらをかきわけて、一階に向かう。「どうして、こうなったの？何これ？」と母に問う。「何が？」母は僕の方を見ず、器用に朝食を作る。「ほら。」と母は僕に向かって、ゆで卵を投げた。僕は悠然と宙を進むゆで卵を、口に受けとめた。

¡1 日目¿ぼくの青春の終わりは本当に突然やってきたーその日ぼくは修学旅行の帰路の途中で新幹線の中にいた。ぼくは違反だったMDを教師に没収され気分が悪かった。「あいつに見つかったなんて運がないなあ」友達のAとそんな話をしていた時新幹線はトンネルの中に入った。その時ぼくがこれまで体験したことのない震動に襲われた。ぼくは気絶してしまった

¡2 日目¿目がさめるとそこは暗闇だった。何が起きたのかぼくは冷静に思い返した。そうだ地震で新幹線が事故にあったんだ。ぼくは痛みをこらえて立ち上がり落ちていたライターで辺りを照らした。すると—そこにはまぎれもない死があった。それも数えきれないほどの—。友達のAもほかの生徒たちも死んでいた。だれか生きてる人はいないのか、ぼくは必死に生存者をさがした。最後の車両にぼくは生存者の望みをかけた。死体の山をかぎわけたがそこに生存者は見当たらなかった。しかしその時かすかな声が聞こえた。生存者がいたのだ。ぼくはその生存者—A子をひきずり出した。パニックに陥っていたA子に起こった出来事を話し落ち着かせ2人で脱出するという結論を見出だした—

¡3 日目¿かきあつめた食料もわずかしかない—ぼくらはトンネルの上にある通気口から脱出を始めた。もしかしたらこの通気口もすぐにくずれてしまうかもしれないという不安を消すかのようにぼくらはせまい通気口を進んでいった。通気口を抜けると水道施設らしきものが現れた。空はまるで夜じゃないかという黒雲に覆われ辺りに人はだれもいない。ぼくらは水を確保できないかという考えからその施設の中に入っていった—

¡4 日目¿ぼくらは東京に向かっていた。昨日の水道施設の所在地は静岡県だった。ぼくらは歩いてぼくらの家がある東京を目標に定めた。幸い水も確保したし食料もわずかだがまだある。東京に帰れば希望があることを信じぼくらはひたすら歩を進めたー

¡5 日目¿ぼくらは東京へ向かう途中で町を見つけた。何か食料がないだろうかという思いからこの町に入った。興廃しきった町を歩いているとぼくらはしばらく聞くことのできなかった声—ぼくら以外の人間の声が聞こえた。ぼくらはその声の方へ向かっていった。しかしその声を発していたのはもはや人間とは言えなかった。複数の人間達が互いの食料を命を賭けて争っていた。ぼくらは必死で逃げた。恐かったからじゃない。人間ではない人間をこれ以上見たくなかったからだー

¡6 日目¿ぼくらは東京へ向かって山を越えようとしていた。ぼくらは何もしゃべらなかった。いやしゃべれなかった。昨日の人間の醜い争いがぼくらの口を

閉ざしてしまっていた。東京でもあんな争いをしてたらーぼくらの頭の中を不安がよぎっていたー

¡世界の終わり¿ぼくらはとうとう東京に着いた。しかし微かな希望も消えてしまった。東京は見るかげもなく荒れ果て、ゴーストタウンとなってしまっていたのだ。たまらずうなだれたぼくらを新たな衝撃が襲った。富士山が噴火したのだ。そして火山灰のまざった灰色の激しい雨が降りしきってきた。ぼくらは意識的に目を閉じた。この世界を壊してぼくらだけの世界を作ろう。そこからぼくらの青春はまた始まるんだ。

(月曜日) いつもと同じ時間に目が覚めたいつもと何も変わらない朝。朝食を詰め込み、いつもと同じ時間の電車に乗って学校に着くまで眠る。気が付くと降りる駅を寝過ごしそうになっていて慌てて電車を飛び降りる。学校に着き、気だるい午前中の授業を受ける。学食で友達と昼食を食べ一休みし、午後の授業を受ける。試験が近いというのにまったく集中できない。午後の授業が終ったので帰ろうとしたが、友達にカラオケに誘われたので行くことにした。友達と別れた後アルバイトへ向かう。深夜 2 時にアルバイトを終え帰宅。シャワーを浴び、明日の学校に備えベッドに入る。今日もいつもと何も変わらない何の変哲もない退屈な 1 日だった。

(火曜日) やはり今日もいつもと同じ時間に目覚めた。またいつもと同じ退屈な 1 日の始まりである。ベッドから出て朝食の用意がしてあるテーブルへ向かう。しかし、そのときいつもと違う妙な違和感を覚えた。何かが違う？しかし、そんな事を考えていてはいつもの電車に間に合わなくなる。急いで用意をし、学校へ向かった。違和感は 1 日中付きまとったが、何なのかはわからなかった。そして、ただ 1 つの違和感を除いては、いつもと同じ 1 日が終わった …

(水曜日) いつもと同じ時間、変わらない朝を迎えるはずだった。違和感は昨日よりさらに増して感じられた。朝食を食べる気にはなれず、着替えて出ることにした。その時ある異変に気づいた。昨日まで狭く感じたいたはずの部屋が広く感じる … 何だ？これは？よく見てみれば目に入るもの全てがいつもより大きく見える。気のせいか？このいつもと違う状況に何故か心が躍った。この日目にするものは全て大きく見えた。いつもと違う 1 日。退屈を壊すこの状況はまさに求めていたものだった。

(木曜日) いつもより遅く起きた。永久に続くかと思えた繰り替えしは、こうしてあっけなく終わった。見渡せば全てが昨日よりさらに大きく感じられた。心が弾む。完全にいつもと違う日常を手に入れたのだ。この日は初めて学校を休んだ。街に出るといつもうんざりするほど見ていた光景はそこにはなく、初めて目にする景色が広がっていた。この日は 1 日遊び家に戻った。そしてベッドに入り眠りについた。ある 1 つの心配事を考えない為に …

(金曜日) 目が覚め、時計に目をやると 1 2 時を回っていた。思った通り昨日より全てが大きくなっていた。考えないようにしてきたが、ここまでくるとさすがに不安がこみ上げてくる。全ての物が大きくなっている …? いや、自分が小さくなっているのだ。このままいくとどうなってしまうんだ？しかし、手に入れた非日常は不安を掻き消し、興奮を呼び起こした。いままででは絶対に

考えられない興奮とスリル。完全に繰り返しの日常から抜け出したのだ。

(土曜日) 一気にカラダは小さくなっていた。昨日まで１３０ｃｍ程度あった身長はもう人形ほどになっていた。一気に縮んだ身長に動揺する。これは悪夢だ … 最近まであれほどまでに抜け出したいと思っていた退屈に戻りたいと強く願った。１日ベッドに潜り込み怯えた。きっと明日目覚めれば悪夢は覚める、そう自分に言い聞かせ無理矢理眠りについた …

(日曜日) いつもと同じ時間に目が覚めるいつもと同じ朝は来なかった …

　今日は日曜日。新しい週がはじまりました。今日もいつもとかわりない平和な日です。あたたかい日差し、波の音。私は沖縄県国頭村字桃原在住の山城勝司、105 歳、そう、世界でも有名な世界最長寿の男だ。100 歳すぎても一人で元気にすごせることが自慢だ。趣味はテレビ鑑賞。昔は琉球空手が趣味だったのだが今では十分に動くことができない。この年になるとテレビが人生のパートナーみたいなものだ。テレビでよくみる番組はニュース番組全般。近頃の娯楽番組はやらせのように思えるし、内容もばかげていて好きじゃない。大好きだった年末紅白歌合戦も昔は好きだったのだか今は知らない歌手ばっかでつまらない。テレビの電源をつける。すると画面いっぱいに『スクープ !!! 世紀の大大大発見 !!! 』という文字がうつしだされた。アメリカの薬品開発トップ企業のアンブレラ社が若返りの新薬Σ を開発したのだ。今まで『若返る』などとうたった商品はいくつもあった。使った結果はいまいちで確かに肌はきれいになる。しかし今回発明された薬は嗅ぐだけで見た目だけでなく、内面もすべて、時間がタイムスリップしたかのように若返ってしまうのだ。私はその時あまりにもばからしく思い、あきれてしまった。テレビ画面にむかい、「そんなことといくら科学が進歩したからってできるわけないだろ！」とつい画面にむかい怒鳴ってしまった。

翌朝。月曜日。学生だったら学校へいき、会社員だったら会社へいく。これが普通なのだか私は退職して早 40 年もたつのでオクマビーチにほど近い瓦屋根の家で毎日テレビをみる生活をしている。今日もテレビの電源をつける。するとまた若返りの新薬Σ について大々的に報道している。効果を実証する VTR も流れたしかにかに科学的に効果が絶大だと実証されたというのだ。話によると一日最高３３回までで一錠嗅ぐと少なくとも 20 歳は若返るというのだ。「私もこの薬が嗅ぎたい。嗅いでまた琉球空手をやって若い子と組手がしたい…。」頭の中はそれだけでいっぱいになった。

翌朝。火曜日。今日も習慣のようにテレビをつける。新薬Σ が気になってしょうがないのだ。すると新薬Σ が世界中に輸出され、世界中新薬Σ ほしさに騒ぎがおきるほどの反響だそうだ。午後には新薬Σ を求める人がふくれあがり、世界中がパニックになってしまった。やはり若返りたいと思う気持ちは万国共通のようだ。

翌朝水曜日。また今日もテレビをつける。今日も新薬Σ の特集ばかりだ。もはやこの地球上でΣ の存在を知らない者は誰もいない。驚くことにこの番組によると新薬Σ のあまりの需要におきた各国の騒ぎの鎮静化対策のために世界中の政府が全世界の各家庭に一瓶ずつ配ったというのだ。これには私も驚いた。む

しろ新薬Σ が開発されたという報道以上に驚いたかもしれない。確かに全世界の人々がほしがっているのはわかったが政府がΣ のために動くなんて予想すらできなかったからだ。

翌朝木曜日。朝起きると新薬Σ が家に届いていた。これを一瓶全部嗅ぐとどのくらい若返ることができるんだろう。と胸をはずませた。その日の朝さっそく新薬Σ を一錠嗅いでみる。その時点でははっきりした効果がみられなかった。効果は科学的に実証されたとはいえ不信感を抱きながらも昼、晩もちゃんと嗅いでその日は寝た。

翌朝金曜日。するとどうだろう。まるで映画のようにみるみる若くなっていて見た目も体力も青年くらいに戻っていたのだ。若くなった喜びに興奮しながらもテレビをつける。そしたら新薬Σ を嗅いだ人たちが若返ったと喜ぶ姿が映りだされていた。しかしそれ以上に話題になっていたニュースがあった。行方不明者が各国で今までに類をみない数で膨れあがっていてそれと同時に地球上の動物が姿を消したのだ。すると行方不明者に妙な共通点があることに気づいた。みんな新薬Σ を嗅いだ若い世代の子なのだ。

翌朝土曜日。私は目をさますことがなかった。人類全てが目をさますことはなかった。あの薬は嗅げば嗅ぐほど若くなり 10 代の若者が嗅ぐと姿形のない時にまで戻ってしまう薬で地球上にこの薬が空気感染し、地球上の生物が絶滅してしまったのだ。

ある日、地球の自転が止まってしまった。しかし、最初そのことに気がつくものはいなかった。最初に気がついたのはＮＡＳＡだった。着陸しようと戻ってきたロッケトの軌道がずれてしまったり、気象衛星の映像がおかしくなってしまったり、海流の変化による温度変化といろいろな障害が発生したためだった。そこで、ＮＡＳＡは優秀な科学者、パイロット、地質学者など地球のコアまで掘り進めるためのエキスパートを結集させた。なぜならば、ＮＡＳＡが地球のコアまでこれまでの数百倍の威力を持つ新開発したレイザービームを積んだ地底探索機をつくり地球のコアまで掘り進んで行き地球の自転を再び動かすくらいの核爆弾を爆発させ地球のコアの海流をうながすものだった。

地球のコアにたどり着く訓練は２日間で終了し、地球の自転が止まってから３日目でついに地球のコアに向けて出発した。当初の予定では、２や３日で到着するはずだった。しかし、深く進むにつれ問題が生じてしまった。出発してからの１日目は何も問題は生じなかったが、

２日目に入るといきなり探索機が止まってしまった。なぜならば、目の前に今までに発見されていなかった鉱物が目の前に存在していたためだった。しかし、この問題は簡単に解決された。レイザービームの出力を少し上げただけで簡単に破壊できてしまったのだ。だが、機体に軽く傷ができてしまった。そして、その日はその後順調だった。

３日目に入りなおも順調に進んでいった。地球のコアまであと少しのところまで来たときにいきなり巨大空間が出現したのだ。その巨大空間には見たことのない生物が生息していた。いきなり巨大空間に出てきてしまったため地面に衝突した勢いで機体が損傷してしまった。そのため修理が必要になってしまった。修理チームが外に出て明かりをつけてみるとそこには見たこともない美しい光景が広がっていた。修理チームが損傷場所に着いて傷を見てみると損傷は意外にもひどかった。さっきの傷ついた場所と同じ場所だったのだ。そのため修理に時間がかかってしまうことになった。その間の暇な時間に核爆弾取り扱い班の人が外を散歩してみたいと言って聞かなく勝手に外に出て行ってしまった。しかし、彼はなかなか帰ってこず帰ってきたと思ったらかなり深い傷を負って帰ってきた。そう、見たこともない生物にやられたのだ。そして、その生物は修理班にも攻撃をし始めてきたのだ。修理班は反撃を繰り返しながら機体に戻ろうとしたがやられてしまった。なんとか機体に戻ってきた爆弾取り扱い班の人も死んでしまった。焦ったクルーの人たちは機体が直ってるのを確認し地球のコアに向けて出発した。機体は万全ではなかったが順調に進んでいった。そして、出発から５日目、地球の自転が止まってから

７日目ついにコアに到着した。核爆弾は海流をうながすよう計算され決めら

れた数箇所で決められた量を爆発させる必要があった。しかし、コアに到着したとたん核爆弾が全部爆発してしまったのだ。なぜか？それは、地底人が追いかけてきたのだ !! そしてちょうどコアに到着したとき彼らもコアに到着したのだ。到着した地底人は核を積んだ機体めがけ砲弾してきたため核爆弾が一気に爆発したのだった。そして核爆弾が一気に爆発したおかげで地球にコアも爆発し地球が壊れてしまった。

¡日曜日¿私は大学に通うどこにでもいるような普通の学生だ。今週もまたいつもと同じなんの変わりもない生活が続く。

¡月曜日¿今日もいつもと変わらない一日が始まった。朝起きてから一時間後には学校へと出掛ける。毎日決まった道を通って最寄り駅に着く。いつもと同じ時間の電車に乗る。今日も授業に間に合った。

¡火曜日¿今日は二限からだ。一限からではないので、いつもより一時間半遅く起きた。そしてまた一時間後には学校へと出掛ける。決まった道を通って最寄り駅までいく。今日も授業に間に合った。

¡水曜日¿今日は一限からだ。一限に間に合う時間に起きる。一時間後に家を出る。今日もいつも通りの道を通る。道の途中、昨日までなかった看板が目に入った。嫌な予感がする……いけない。電車に乗り遅れる。書かれている文を読むことなく駅へと向かう。ホームに着いてから時計を見る。良かった。いつもの電車はまだ来ていない。

今日も授業に間に合った。¡木曜日¿今日も一限からだ。私は駅に向かっている。途中、右から声がした。近所のおばちゃんだ。おはようございます。軽く挨拶をし、また駅へと向かう。駅に着いた。いつもと同じ電車に乗れた。そのはずなのに、なぜか落ち着かない。何か忘れている気がする。

¡金曜日¿朝起きて支度をする。ふと思い出す。そうだ。昨日なぜか違和感があったのだ。あれは何だったのだろうか。家を出る。駅まで歩く。何か思い出せそうだ。確かこの辺で……。車が後ろからきた。右に避ける。一台、二台、三台。しばらく途絶えることがない。ふと、何台か後ろの車の横に立つ看板に気づく。思い出した。あの看板。一体何が書かれているのだろうか。気になる。しかし、ここで戻ったら遅刻だ。嫌だ。戻ることはできない。

悔しい。見れない。駅へと向かう。定刻通りに電車がくる。¡土曜日¿今日も一限からだ。支度をし、家を出る。看板のことを思い出す。今日こそ読んでやる。足取りが早くなる。が、目の前に今までなかった物体が現れている。これは何だ。完全に道を塞いでいる。嫌な予感がする。道路整備員が何か言っている。この道は通れないから回り道をしてくれ？冗談じゃない。そんなことをしていては電車に乗り遅れてしまう。さすがに走った。駅に着く間際、電車がホームに着くのが見える。まずい。焦る。階段をかけあがる。

登りきった！電車は？いた。まだ発車していないようだ。急いで飛び乗る。間に合った。安心した後、怒りがこみあげてきた。なぜもっと早く看板を見なかったのか。水曜日に看板の存在に気づいた。しかし見れなかった。木曜日は？そうだ。おばちゃんに挨拶をした。確かおばちゃんは右にいた。看板は左。くそ。肝心なところでおばちゃんに注意をひかれた。金曜日は……そうだ。車だ。

そうか！あの車は道路工場の。やられた……… でもまぁ、間に合ったから許すとしよう。「次は～」

　車内アナウンスが流れる。ん？今なんて言った？耳を傾けてもう一度注意深く聞く。「次は～」……… 違う。次の駅はこんな名前ではない。やってしまった。急ぐあまり逆方面の電車に乗ってしまったようだ……… 遅刻だ。

　今から戻れば数分の遅れで済む。しかしそんなことは私にとって問題ではない。完全にやる気を失ってしまった。何もかも……

　月曜日朝起きて、いつものようにテレビをつけるとニュースをやっていた。ニュースの最後にアナウンサーがあくびをしていた。学校へ行くため家を出ると歩いてる人のポイ捨てが目立つ。電車では携帯で大声で話す人が多く、時刻どおりに到着しなかった。大学でも休講が目立った。家に帰っても母がいつもどおりに夕飯を作ってはくれなかった。

火曜日
起きてテレビをつけた。アナウンサーのスーツ、ネクタイが昨日と変わっていなかった。放送中に何度も読み間違いをしたが全く訂正しなかった。電車に乗ろうとするが、かなりダイヤに乱れがあるようだった。自分も行くのが面倒くさくなり、帰って寝てしまった。

水曜日
だんだん自分自身、やる気がなくなってきた。アナウンサーも同じようで、今日はスーツすら着ていない。外に出てみると空いている店が少なく、値段も高くなっている。帰る途中、自販機が壊されているのを何度か見た。

木曜日
朝、テレビをつけるとほとんどのチャンネルが映らない。どうも放送自体を中止しているらしい。外に出てると、コンビニの商品をトラックで根こそぎ持っていく人などが見られた。ただ、グループで何かやっている人はほとんどいなかった。両親が失踪した。

金曜日
独裁者の君臨する某国で、世界戦争を企てようとした独裁者が暗殺された。世界のほとんどの国で政府というものがなくなり、略奪や殺人などが異常に増えているようだ。そんなニュースを最後にテレビは映らなくなり、夜までに電気・ガス・水道全てがストップした。街には死体がかなり増えた。そのうち二人は自分が殺したものだった。

土曜日
木曜日の夜あたりから、身の危険を感じて眠れていない。銃の乱射、ミサイルによる爆撃などが続いている。街はかなりの混乱状態で、警官が子供を銃の的にしていたり、全てを壊しながら戦車が走っていたりした。友人に会ったが、話しかけようと近づくといきなり刺された。なんとか逃げられたが、かなりの深手だった。どうも「仲間」という概念自体が今の世界では通用しないらしい。

日曜日

出血で意識がもうろうとしていた。たまに銃声や悲鳴、怒号が聞こえるが、昨日よりかなり数が少ない。どうやらほとんどの人間が死んでしまったようだ。何かが光った。… ここで自分の意識はなくなる。原因は核ミサイルによるもので、その後、二発別の場所から発射され世界は完全に終わってしまった。

月曜日、起きてシャワーを浴びる。猫に餌をあげて水を取り替える。白黒の模様に違和感を覚える。ちょっと太ったのか、ぶんちゃん。天気がいいから洗濯をして、ついでに布団も干そう。少し汗をかく。この季節に汗なんてかかないから気持ちのいい朝だ、なんて思いながら学校へ。やっぱり今日は暖かい日。コートを着ているのは私だけだった。髪を黒く染めたよっちゃんは少し大人っぽく見えた。

火曜日、洗濯物を干そうとして、梅の花が咲き始めているのに気付く。今年は早いなぁ、暖冬なんだなやっぱり。昨日にも増して今日は暖かい。ぶんちゃんの黒い部分が広がっているような気がする。最近猫のことなんてよく見てなかったから気のせいかもしれない。コートを持たずに学校に行った。よっちゃんが眼鏡をかけていて、眼鏡もいいかもなんて思った。なぜか授業を受けずに帰ってきた。歩き慣れた下北の街で道に迷う。ホントにこの街は店の入れ替わりが早いんだから。

水曜日、朝起きて窓を開けると、梅の木がやけに下の方に見える。今日も暖かい。というよりも暑い。薄着で家を出る。アパートの階段を降りていて、2階のはずの自宅が3階になっていることに気づく。いよいよ変だ。はっとして家に戻ると、ぶんちゃんが完全に黒猫になっていた。

木曜日、夏日。まだ1月だというのにTシャツでも汗ばむ陽気。仕方ないからプールに行こう。よっちゃんは眼鏡をかけたまま泳いで、それをたくさん笑った。よっちゃん、なんだか事務のおばちゃんみたいだよ。下北沢はずいぶん年齢層があがった。見かける事が珍しくなった学生はよく見ると制服を着たおじいちゃんだった。苦笑。

金曜日、朝方早々に目が覚めてしまう。膝やら腰やらが曲がって痛い。鏡をみるとそこにはおばあちゃんになった私がいた。杖をついて学校に向かうも学校には誰もいない。黄色く色づいたいちょう並木の下を銀杏を踏みながら歩く。

土曜日、大雪。老体にはこたえる。でも飲み物がないからと外に出ると、戦前の子供のような服を着たおじいちゃんおばあちゃんたちが雪合戦。それに混ぜてもらう。その人たち以外に街にはひとっこひとりいない。その中の一人がよっちゃんであることにだいぶ経ってから気付く。

日曜日、全く起き上がれない。目も開けられない。聞こえてくる音も何もない。何も、思いつかない。